

説 教

聖日礼拝

北浜チャーチ

黒田禎一郎

2017年10月8日（日）

主 題：「信仰によって生きる人」

—「手」と「目」—

テキスト：ヘブル人への手紙11章1～3節

**はじめに**

- ・ヘブル人への手紙11章には「信仰」という語が多く出てきます。  
この書簡全体で「信仰」という語は32回出てきますが、11章だけでその内の24回出てきます。したがって、この書簡は「信仰」の書であると言えますでしょう。
- ・では、私たちが普通「信仰」と言う時、どんな思いを浮かべるでしょうか。朝に、神棚や仏壇に頭を垂れて祈ること、夕には、一日をどのように過ごしかを振り返り、自分の熱心さと信仰の足りなさを反省することが、それが「信仰」であるととらえる人がいます。
- ・そういう「信仰」というのは、スポーツ選手が身体を鍛えるために自制し、努力する姿に似ていますね。ゴールに向かい、熱心に鍛錬する人です。ある面から見れば、それは立派で美しいことです。だから「信仰」を持つ人に悪い人はいない、むしろ熱心になれば、人々から信仰心の篤い人だと称賛されるのです。
- ・また、ある方は「信仰」は知的に認識できなければ、信仰と言えないと言います。知的に認識するとは、私たちの五感（視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚）等の能力です。しかし超自然界における認識は、五感だけで把握できるものではありません。このように、「信仰」のとらえ方は様々であります。
- ・皆さんは「信仰」をどのように、とらえているでしょうか。  
ここで大切なことは、聖書が言う「信仰」は、これらの「信仰」とは全く違うということです。フランスの哲学者ベルクソン（Bergson）は、認識について次のように言いました。「自然界における認識は、対象とは距離を置いて眺める仕方のできるのに対し、超自然界における認識は、その中に飛び込んで行かなければ出来ない。」と言いました。すなわち、「飛び込んで行かなければ認識出来ない。」ということです
- ・ヘブル人への手紙の著者は、「**信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。**」（11:1）、と言いました。  
現代訳聖書（Modern Japanese Bible）では、次のように訳されています。

「信仰とは将来に起こることを確かなものとしてつかむ手であり、まだ見ていないものの確実な証拠を見る目である。」

- この現代訳は分かりやすですね。信仰とはむやみやたらに信じる盲信ではありません。確かな証拠があって、それを認識するものです。それは自分の努力や鍛錬によって得るものではありません。キリストの十字架を信じることによって与えられる、一方的な恵みによるものです。そして、それは神から与えられる贈物なのです。
- 新改訳聖書では「確信」、あるいは現代訳では「確かなもの」と訳されて語は、本来商業用語として「権利証書」を意味する語です。それは保証のことです。では、今日は聖書が教える「信仰」について考えてみましょう。2点

### 大切なポイント

#### 1. 神に喜ばれる信仰

- 神が喜ばれる信仰は、辛い時や、暗闇においても神を信頼して歩むことです。なぜなら永遠のいのちの確信をもって、日々生きることができるからです。信仰生活は、見えるものだけに信頼する生き方ではありません。神は約束された御国のために生きるよう命じられました。
- しかし現実はいかがでしょうか。辛い時、悲しい時、心が落ち込んだ時でも、神への信頼を持ち続けることができるでしょうか。それは易しいことではないことは明らかです。現代の物質中心的な世の中の生き方とは、まったく違う生き方です。
- いったい何が、苦しみの下で力と支えになるのでしょうか。旧約聖書時代の多くの聖徒たちは、その模範を示してくれました。聖書は、証人として私たちを取り巻いていると語っています。何という大きな励ましではありませんか。神に喜ばれる信仰の歩みをした聖徒たちが、証人としているのです。私は現代訳聖書視点から、次の2点を挙げたく思います。

#### 1) 信仰はつかむ手である

11:1 「信仰とは将来に起こることを確かなものとしてつかむ手である。」現代訳

- 私たちは今この世界を見て、見えるものや、手で触ることのできるものや、耳に聞こえてくるものを確かなものと思っています。ですから、将来起こることや、目で見えない超自然界の事については、まったく分かりません。
- 将来のことについては不安があり、思い煩いがあります。私のちっぽけな頭でいくら考えても、何も解決はありません。いくら将来のことについて計画を立てても、人間は自分にとって不都合なことはその中に入れられないのです。

- そこでいざ問題が起こった時には、どうしていいか分からなくなります。だれも自分の将来について分かりません。ですから思いがけないことが起こり、あわてふためいてしまいます。どんな事が起こっても大丈夫という心構えが必要です。
- それは生命保険や損害保険に入っていれば大丈夫と言うものではありません。(注意：保険は大きな助けになりますから、保険を否定しているのではありませんから、誤解がないように)。私の言う意味は、心の範囲まで届くケアのことです。
- どんな事が起こっても大丈夫という心構えは、何によって出来るかと言えば、「信仰」によるのです。自分の知恵や力でどうにもならないような事態が起こっても、そこに天地を造られ神がおられること、そして神が私とともにいてくださる、と信じることが「信仰」なのです。
- 現代訳聖書は、「**信仰とは将来に起こることを確かなものとしてつかむ手である。**」(11:1)と訳しています。神が私とともにいてくださいますから大丈夫、という信仰です。つまり、信仰は「確かなもの」をつかむ「手」であるということです。ベルクソンの言葉を借りれば、意思を固めて飛び込むことです。それが保証書となるのです。もう一点は、「信仰」は見る目であることです。

## 2) 信仰は証拠を見る目である

### 11:1 「まだ見ていないものの確実な証拠を見る目である。」 現代訳

- 私たちは耳で聞き、目で見て、手で触れて確かめますが、信仰という目で見ると、肉眼では見えないものでも、そこに確実な証拠を見ることができのです。
- 信仰的に物事を認識するには、私たち認識する側の確かさではありません。信じる対象である神の確かさが問われます。相手がどのようなものであるかではありません。救いの神が、私たちを本当に救ってくださるお方が大切なことです。
- 天父神は一人子を犠牲にして、私たちの罪の身代わりに十字架上で、罰せられるほどに愛してくださるお方です。その神が私たちのために書かれたのが聖書です。ですから、そこに確実な証拠があると言えます。
- 神が喜ばれる「信仰」は、「確かなものとしてつかむこと」(意思で受け止めること)、そして「まだ見ていないものの確実な証拠を見る目」です。それは私たちの感覚では理解できません。しかし聖書を読むならば、アブラハムは、その奥義を経験した人でした。
- 彼は信仰によって未知の所へ進みました。信仰によって、彼は理不尽なことを受け止めました。結果、約束を自分のものとして得ることができました。

彼は私たち信仰者のお手本であり、信仰の父とも呼ばれる人です。アブラハムは聖書の教える信仰を、文字通り歩んだ人でした。それは神が喜ばれる「信仰」でした。

## 2. 神に喜ばれる信仰生活

### 1) 信仰によって歩む人生

11:2 昔の人々はこの信仰によって称賛されました。 新改訳

11:2 神を信じた昔の人々は、この信仰によって良い評判を得た 現代訳

- ・ 神に喜ばれる信仰生活は、「信仰によって」称賛されました。また良い評判を得た、とあります。それは、どんな生活を言うのでしょうか。信仰は、神が許されることを素直に受け止めることです。そしてその先にある結果を前もって、受け止めることです。⇒それが、時満ちて確実な証拠を見ることになります。

11:3 信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。

- ・ 著者は、ここで天地創造の出来事も信仰によって、受け入れることができると教えています。神が天地を創造さされた時、そこに立ち合った人はいません。しかし、それを信仰によって受け入れることができるのです。

### 2) 確かな人生

- ・ 創世記に記されている天地創造の出来事は、モーセが神からの啓示を受けて記したものです。それによると、天地創造の出来事は一言で行われたことが分かります。「光よ、あれ」と言われると、光ができた。と聖書は記録しています。つまり神のご意思ひとつで、事は成るということです。神はそのご意思をみことばによって、私たちに知らせてくださっています。神の一声で、光ができました。なんと雄大な出来事でしょうか。それが私たちの神です。
- ・ 信仰の目をもって見るならば、神が無から創造されたことを知ることができます。神が万物を無から創造されたお方であることは、私たち人間を含めてどんなものでも神の支えがなくなれば、たちどころに無に帰してしまう存在であることを意味しています。このことが本当に分かれば、私たちはもっと謙遜に生きることができるのではないのでしょうか。

{例 話} 信仰によって生きる

- ・ 真のクリスチャンは、ダイバーにたてることができます。水中で働くには、酸素を定期的に補給しなければなりません。そうでなければ、死んでしまいます。同じように、クリスチャンも霊的に新鮮な空気を魂に送り込まなければ、死んでしまいます。
  - ・ 祈りは空気を吸い込む口のようなものです。信仰は空気を流すパイプです。このパイプを通して、天からの清い空気を吸い込み、多くの恵みを受け強められます。それによって、この薄暗い世界でも働きつづけることが可能になります。
  - ・ この世の使命が終われば、ダイバーはつけていた重りをとり、身軽になった体を水面に浮かび上がらせるように、クリスチャンも天へと挙げられていくのです。
- ・ 信仰によって生きる人は、信仰を持たずに生きる人には見えないものが見えます。人生の最後の目標もよくわかり、自分の本当の姿も分かり、この世界を造られた神の前に生きることができるからです。それは素晴らしい人生です。信仰を持っていない人には分からない確かな人生です。

## ま と め

主 題：「信仰によって生きる人」

—「手」と「目」—

- ・ 私たちは神に喜ばれる信仰について、みことばから神の声を聞きました。神が喜んでくださる信仰、それはどんな信仰でしょうか。それは信仰によって歩む人生のことです。
- ・ では、信仰によって歩むとはどんな道でしょうか。
  1. 将来に起こる確かにものをつかむ「手」である
  2. まだ見ていない証拠を見る「目」である
- ・ いかがでしょうか。私たちは信仰の「手」と、信仰の「目」を持っているでしょうか。

\* God bless you!